

サンラザロ病院での研修を終えて

長崎大学熱帯医学研究会
フィリピン研修班

長崎大学熱帯医学研究会の難民医療問題勉強会に所属する五名は、2018年9月12日、13日の二日間でフィリピンのマニラにあるサンラザロ病院を見学した。今回の研修の目的は、インターネットや書籍といったメディアだけでは知り得ない、途上国の住民を取り巻く公衆衛生や医療環境の現実を知ること、かつそれらの問題に対して病院や行政が行っている取り組みを学ぶことの二点である。その上で、病院における医療環境の現実や実際に病院が行っている取り組みを学ぶために、サンラザロ病院への見学を希望した。

一日目はサンラザロ病院において、朝の回診や長崎大学研究室を見学した。

朝の回診を通して一番驚いたことは、感染症対策に対する医療従事者の意識の低さである。結核疑いや麻疹、水痘の患者と接する時も、医師はマスクをせずに会話をしていた。さらに同室で患者の世話をしている家族もマスクを着けておらず、医師から注意されていたが、その医師もマスクを着けていなかった。マスクの装着といった簡単な対策さえも行わないのは、暑さも原因であると思う。私たちが実際にN95マスクを装着して麻疹患者や水痘患者と接した際も、暑くて息苦しく、回診が終わった後はすぐにマスクを外していた。しかしながら、暑さのことを考慮しても、危険を認識しているはずの医療従事者さえマスクをつけないという光景は、日本で事前に大学病院を見学した私たちにとって、衝撃的なものであった。加えて、看護師および家族の役割も日本と大きく異なっており、その違いも興味深かった。日本では患者の身の回りの世話をするのは看護師であり、家族は設けられた面会時間に合わせて患者と面会するようになっている。一方サンラザロ病院では、患者の身の回りの世話をするのは家族であり、私たちが病院にいる間、家族はずっと患者の傍に付いて体を拭いたり風を送ったりしていた。また、あまり看護師の姿を見る機会がなく、看護師が患者の世話をしている場面を見る事がなかった。医師によると、看護師の主な仕事は、バイタルをとったり書類作成を行ったり、採血やワクチン接種を行うことのようにであった。

加えて、疾患に関する短い講義を安田先生にいただいた後に、もう一度患者を診る機会があり非常に勉強になった。私たちのグループは一年生と二年生で構成されており、疾患に関する知識は事前勉強で得た知識だけであった。しかし、レプトスピラ症や腸チフスの患者に会った時には、身体所見や彼らが話す病気の経過・病態が、齊藤先生や安田先生が教えてくださった知識と合致しており、非常に興味深いと感じた。

午後には、サンラザロ病院内にある長崎大学の研究室を見学した。それほど大きくない部屋の中に様々な機械が置いており、フィリピン人の研究員らが働いていた。興味深かったのは、私たちがサンラザロ病院で見た中で、その研究室が衛生的に一番嚴重であったこ

とである。さらに、小泉先生によるレプトスピラ症の小講義を聞く機会があり非常に有意義であった。培養したレプトスピラを顕微鏡で見ることができ、とても感動した。想像していたよりもかなり活発に動いており、私たちの中にはかわいいという意見と気持ち悪いという意見があった。このような菌を自分の目で見るのは初めてであったので、教科書に載っているよりも鮮明に一つひとつの菌が見えたことに驚いた。

二日目は朝からトンド地区にあるスモーキーマウンテンクリニックを訪れた。まず驚いたのは、到着して乗っていたバンのドアを開けた瞬間に嗅いだ、異様な臭いである。マニラの中心部とはまた違う異質な臭いがした。スモーキーマウンテンクリニック自体は数年前に建て替えたばかりということもあり、非常にきれいであった。医師が一人で診察を行っており、二階では多くの母子が診察を待っていた。薬剤管理は看護師が行っており、当然のことながら薬剤師もいないので薬は看護師が処方していた。一階には産科エリアと結核対策の DOTs room があった。DOTs に関して全く知識がなかったが、同行していた鈴木先生と、結核を担当しているクリニックの看護師が詳細に教えてくださった。助産師は一人だけで、彼女はスモーキーマウンテンがある地区で生まれたすべての母子を把握し、産後の様子を見に行くということを行っているようであった。行政でさえ把握できていない子の存在さえもきちんと把握し追跡していることに驚いた。スモーキーマウンテンはゴミ山というよりもゴミが既に土に返っているものが多く、言われるまで元はゴミであったことに気づかないほどであったが、ハエは住居にも山にも至る所に飛んでいた。

しかしながら、スモーキーマウンテンの訪問全体を通して心に残ったのは、トンド地区の住民があまり「不幸そう」でなかったことである。トンド地区は全体的にじめじめした印象ではなく、どちらかと言えば住民は明るく挨拶してくれたように思う。何よりも子どもたちが楽しそうであった。もちろん衛生的に良い環境ではないが、マニラ中心部の物乞いよりは幸せそうに見えた。このような違いが発生する理由は様々であろうが、「貧富の差が直接見えているかどうか」は重要な違いではないかと思う。マニラの中心部の住民は、裕福な者と自分たちの生活レベルの差を日々目で見えて実感している。しかしトンド地区の住民は、ごみを拾ったりトライシクルやジプニーを運転したりすることで生計を立てている点では、基本的にみなが同じレベルで生活している。「マニラで貧富の格差が広がっている」といえども、格差を受けている彼ら自身の感じ方は一様ではないのであろうと思った。

今回のサンラザロ病院研修では、一日目は病院内の見学、二日目は地域診療所の見学を行うことができた。事前勉強会において写真を見たり話を聞いていたりしたけれども、やはり実際に患者や医療環境、住宅環境を見ることで様々な印象が変化した。さらに、日本では身近でない疾患を見ることができたことは、今後の臨床医学の勉強や病院実習において大いに役立つと思う。最後になり恐縮であるが、この研修の実現のために尽力してくださった多くの先生方にお礼を申し上げたいと思う。